

今江祥智 の本

第28卷

ズボンじりしのクマ

理論社

今江祥智 の本

第28卷

ズボンじろしのクマ

理論社

今江祥智の本第28巻

一九九〇年五月初版

一九九〇年五月第一刷

著者 今江祥智©

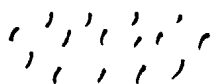
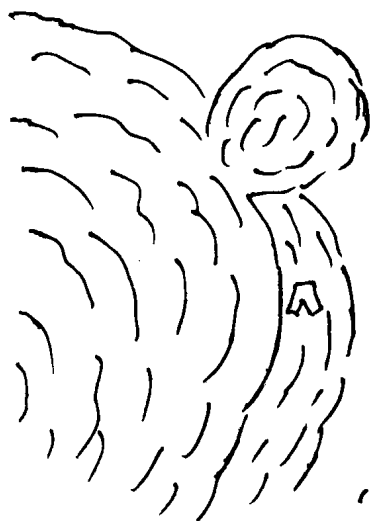
発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話〇三(二〇三)五七九一〈代表〉

振替東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます。



リンゴの木の下で 7

ズボンじるしのクマ 29

1 どーしたのォ…… 31

2 クマ、うそつかない 42

3 ズボン、どこなのー 53

4 月あかりの森で 66

5 およぐクジラ 78

6 しっぱい、しっぱい 92

7 空中サーカス 103

8 こおったことば 115

9 氷の国へ(一) 126

10 氷の国へ(二) 137

11 アイス・デパート(一) 151

12 アイス・デパート(二) 162

13 いきはよいよい 174

14 あの夜のできごと(一) 185

15 あの夜のできごと(二) 199

16 また、森へ 211

あとがき 225

解説 工藤直子 227

編集 小宮山量平

装幀 平野甲賀

装画 長新太

制作 山村光司

発行 鈴木良司

製作担当 金井重雄

下向実

編集担当 日比野茂樹

高林久美子

成澤榮里子

製作 P & P

本文 加藤文明社／よねむら写植

表紙 ダイニツク

カバー トラヤ印刷

製本 誠製本

用紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本
第28巻

リンゴの木の下で
ズボンじるしのクマ

リンゴの木の下で

―にちゃん、もうねむった？

二だんベッドの上から、二郎がそっとたずねた。

―……いんや。

―あしたから、はるやすみだもんね。

―ああ。

―しゅくだいなしのはるやすみだもんね。

―ああ。そうだった。

―うれしくって、もう。

―ねむれないのかい。

―ん。まいにちなにしてあそぼかなって。おもっただけでも、わくわくしちゃう。

—きょねんのはるまでは、おんなじだった。

—こんどはちがうの？

—ああ。そろそろじゅけんべんきょうをして、だとき。かあさんがね。

—だって、まだ二年もさきのことでしょ。

—だけど、そろそろだとき。

—ふうん、せっかちだね、かあさん。

そのとき、げんかんのでんわがなる音がした。いやに大きくひびいた。それなのに、かあさんもうさんでもない。

—どうしたんだろ。

二郎がつぶやいて、おきあがった。でんわは、なりつづけている。二郎は、じぶんがよばれているがしてベッドからおりた。

—あ、早川さん。えらいことや、おじいちゃんがたおれはったんやわ。あわてたらあきませんで。おちつきなはれや。

でんわのむこうで、だれかしらないこえが、いきなりそういった。よくわからないことばだけど、あわててるのはそちらでしょ……とおもいながら、二郎はできるだけゆっくりとこたえることにし

た。

—はいはい、こちら早川です。ちゃんときいてます。

—まいにち、とけいみたいにきちんとさんぼしはる、おじいちゃんのすがたがみえへんよってに、きになってうちへいってみたら、たおれてはったんや。いつもさんぼにつれてはるけつたいなイヌは、こやであばれてるし、もうあわててしもたわ。

—はいはい……。

ちゃんときいているしるしに、きちんとへんじしながら、二郎は、おじいちゃんのことをおもいおこしていた。

おじいちゃんが二郎んちへやってくるのは、年に一かいくらいだ。きまってお正月で、

—おとしだまをとどけにきたんや。

と、きまっていって、しんせきじゅうで一ばんたくさんくれる。カシの木でできたつえ、みたいにかいつとしたからだのおじいちゃんのこと、二郎は大すきだった。

あんなにつよそうなつえ——いや、おじいちゃんが、おれる——いや、たおれるだなんて……。

二郎はなんだかおかしいぞというきもちになった。そこで、あいてがまだ早口でしゃべるのに、おつかぶせるように、きいてやった。

—たおれたっていったって、目も耳も口も、おげんきなんでしょ、おじいちゃん。

—……なに？ 目も耳も口もげんき……やと？ そらまあ、そうやけど。とにかくびょういんへはこんだんやさかい、みうちの人^{ひと}がきてほしいんや。つきそうてほしいんや。

—はい。わかりました。

と、二郎はこたえた。それから、あいての名もびょういんの名も、ちゃんときいた。おれいをいってでんわをきったとき、かあさんがおきてきた。二郎は、でんわのなかみを、かあさんにきちんとつたえた。

—まあ、たいへん。だから、ひとりぐらしはよしてこっちへきてくださいっていったのに……とうさん、おきてくださいよ、たいへんなのよ……。

たいへんなのは、おじいちゃんがたおれたことだけではなかった。とうさんはあしたから九州へでかけるし、かあさんもしごとで秋田へいくんだって。じゃあ、だれがおじいちゃんとこへいくんだ。二郎もかあさんもうさんも、にいちゃんもそろってうでぐみしてしまった。

—ふたりでるすばんなら、だいじょぶっておもってたの。はるやすみだし、あしたのあさ、たのむつもりでいたの。それが、まさか……。

とかなんとか。かあさんときたら、いつもこうなんだ。そりゃ、かあさんもうさんとおんなじようにおつとめしていて、そのうえ、うちのこともあるんだから、いそがしいのはわかるけどさ……と、二郎はおもっていた。でも、いまはもんくをいうよりも、おじいちゃんのことだとおもいなお

した。

―あのさ、ぼくでよければ、いくよ。

―小学二年生のつきそいでいいのかなあ。

―とうさんがくびをかしげた。

―でも、うちのほうもあるし、うちはにちゃんのほうがいいし。

―そりやま、そうかなあ。

―だったら、ぼくしかないでしょ。

―そりや、そうだ。

―だから、いいじゃない、二年生だって。としじゃなくて、ちゃんとできるかどうかでこと
でしょ。

二郎は、ちょっとはらをたてたこえになった。

―わかった。わかりました。じゃ、二郎くん、よろしくたのみます。

とうさんが、二郎のことをちゃんと一人まえにあつかってくれたので、二郎もきげんをなおした。
はりきって、でかけるしたくをした。

*

うまれてはじめてのひこうきだった。二郎は、はなをまどにくつつけて、子ブタのかおになって

とんでいた。大阪につくまで、子ブタでいた。

それから、でんしゃ、ちかてつとのりついで、びょういんまでかけつけた。

—ハヤカワカクザエモンさんですか。あ、三がいの三六七ごうしつです。

うけつけの、かわいいかんごふさんにおそわって、三がいまでかけのぼっていた。かんごふさんは、カクザエモンさんのおまごさんのげんきのよさを、かんしんしてみおくっていた。入口の小さなふだに、「早川角左衛門」殿と、おじいちゃんの名がかいてあった。四かくぼって、なんだかいばってみえた。ほんもののおじいちゃんとは、まったくちがってみえた。それで、二郎もすこしかたくなってしまい、

—ごめんくださいあい……。。

と、よそいきのこえになった。

—だれかいな。ははあ、二郎やな。ようきてくれたわ。たのみがおますのや。はよはいってんか。まちかねたこえで、おじいちゃんというのがきこえた。二郎がびょうしつにとびこむと、おじいちゃんはベッドの上に、きちんとすわっていた。

—れれれ。おじいちゃん、そんなことしてもいいの？

おもわず二郎はきいてしまった。

—かまへんかまへん。これこのとおり、わしはもうげんきなんや。ここをだしてほしいんや。そ